

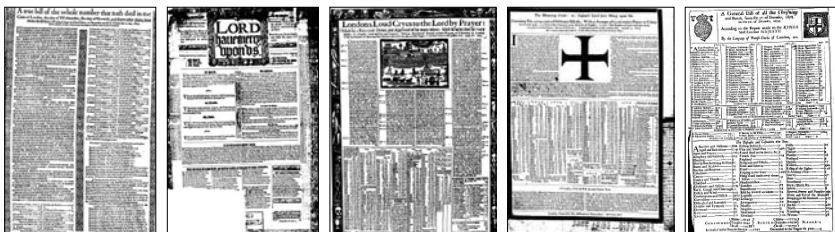
# 16 17世紀イングランドにおける ダンス・マカブレ ペスト流行時の「死の舞踏」

國 崎 倫

## 1 . はじめに

16世紀後半から17世紀にかけてロンドンのテムズ川南岸に演劇文化が大輪の花を咲かせたが、この時代はまたペスト禍に彩られた時代であった。「死の舞踏」は、そのペスト禍を背景として流布した死を表象する図像である。それはしばしば寓意詩とともにブロードシートに印刷されて巷間に流布した。本稿の目的は、初期近代イングランドのペスト禍を再検証し、「死の舞踏」の死表象を分析することにある。

ロンドンで発生したペスト禍による被害程度を伝える資料のひとつとして、「死亡週報」( the weekly Bill of Mortality ) がある<sup>1</sup>。死亡週報を印刷発行する慣習は16世紀中頃に始まり、18世紀前半頃まで続いたとされるが、1603年以降に印刷されたものの例として、飾り文字や木版画の美しい数点をここに挙げる。



A ) 1603年

B ) 1636年

C ) 1665年

D ) 1665年

E ) 1678年



いる。その中から事態の深刻さを顕著に示す数字を一部取り上げると、1603年の年間埋葬者総数38250名、うちペスト感染者30583名、最多時となる9月上旬の一週間では3385名が共同墓地に埋葬されている。1625年については年間埋葬者総数54082名、うちペスト感染者35428名であり、8月中旬の一週間で5205名が埋葬されたとある。1665年の被害はさらに甚大で、9月中旬の一週間で8297名が埋葬されている。

ただ、死亡週報の記すデータは完璧ではないということを指摘しておかなければならない。死亡週報はイギリス国教会 (Church of England) に限定した死亡埋葬者数を記録し伝えるものであり (Defoe 282) ここにローマカトリック信者や、ペスト流行時に虐殺迫害されたユダヤ人などの非国教徒の数は含まれていない。筆者が調査を行った死亡週報のほぼ全てが埋葬者数の記載について “Died” ではなく “Buried” と記しているように、数字はイギリス国教会の信者を対象として教会が死亡確認と墓地埋葬を許可した件数を意味すると考えられ、当時の疫病感染死亡者全体数ではないだろう。デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) が1722年に出版した『ペスト』(A Journal of the Plague Year) において言及される1665年についても、市民は、実際の死者数は週報の数字よりはるかに多いと考えていたという。

このように、16世紀末から17世紀中頃のロンドンには、ペストの暗い影が常在していたことは確かである。「死の舞踏」が流布する土壌となったのは、この恒常的なペストの闇であった。

## 2. 「死の舞踏」

What mean you to make your houses gay,  
And I must take the tenant away,  
And dig for your sake the clods of clay.

住処を快適にしたいのであれば  
前の住人を追い出してやろう  
お前のために土を掘るのだ

( Thomas Hill, *The doleful dance*, ll.19-21 )

中世初期、死とは瀕死者や死者の身支度や典礼に則って進行するものであり、

病氣と死は患者を周囲と結びつける儀礼として機能した。しかし、ペスト流行時、死体の氾濫に伴う集合的無意識が慣習を放棄し、増え続ける犠牲者の遺体を呑み込むための土地面積が不足すると、埋葬後に肉体が土へ還るのを待ってから遺骨を他の場所へ安置するための空間的・時間的余裕がなくなる。このような状況は珍しくなかったとされ、パリの聖ジノサン墓地などの集団墓地の例が報告されている。疫病が流行ると、臨終を看取る医療従事者や聖職者らは早くに感染し、墓地と家屋を往復する遺体運搬荷車も姿を消していく。行政はペスト感染家屋の扉に油性で赤十字架を記し、監視をつけて居住者の軟禁を試みたが、次の詩行が詠い伝えるように、患者を残して逃亡する者は少なくなかった。

“No decent Mourners, and no Friendly Groan,  
“Neglenting others Fates, all wept their own.

鎮魂者は無く、友情の嗚咽もない  
他人の運命など知らぬ、己が大事

Next they'd be taken with most grievous Pains,  
By Vomiting, which all the Body strains;  
And falling down, their dearest Lives avoid,  
And many in this manner were destroy'd.

やがて激痛にとらわれ  
嘔吐して全身の水分は搾り取られた  
伏すと、最愛者は彼らを拒絶  
多くがこうして見捨てられ死んだ

(*God's judgments shewn unto mankind*, ll.11-12, 33-36)

感染を免れる最善方法は逸早く遠くへ逃げることでであると大真面目に記す資料は、1636年にトマス・テイラー (Thomas Taylor, 1576-1632) の名前で印刷された一葉、*An answer to that question, : Hovv farre it is lavvfyll to flee in the time of the plague* (STC (2nd ed.) / 22354) など多く現存する。必要に迫られた近親者が家族の遺体を自ら集団墓地の墓穴へ投げ込むようになると、人は死を迎えるための精神的・物質的準備をすることもできず、個人として埋葬される機会を奪われてしまうのである。

このような死の氾濫において死を受容し表象しようと努める有様については、パリの印刷業者グエイヨ・マルシャン『死の舞踏』、ヨハン・ホイジンガ『中

世の秋』、ハンス・ホルバイン『死の舞踏』、ペトラルカ『凱旋』、フランドル地方の画家ピーテル・ブリューゲル『死の勝利』など、大陸で生み出された著名な作品に描出されている。研究史においてはフィリップ・アリエスや現代フランスのアナール学派、国内では小池寿子氏、蔵持不三也氏がこの分野における先駆的な研究を行っている。本稿は大陸の作品ではなく、筆者の研究対象とする16・17世紀ロンドンに限定した印刷出版物の実証的考察を試みるわけだが、ここで取り上げる作品には作者不明のものが多く見られる。これはつまり、後世に名を残さない市民の手に依る作品が巷に出回っていたということ、「死の舞踏」というモチーフが16・17世紀ロンドンにおいても決して珍しいものではなかったことを意味するだろう。

「<sup>ダンス・マカブレ</sup>死の舞踏」(Danse Macabre)について、これは「<sup>ル・モール</sup>亡者」「<sup>ラ・モルト</sup>亡者女」のダンスである。ヨーロッパ広域に流行したこの死表象の分布図は、疫病感染区域を示す地図とおそらく一致する。多くの図像を見ると、そこでは腐乱死骸像(Transi)が大きく断ち割られた腹部で蛆虫を養い、時に弦楽器・打楽器を携えて楽し気に軽快なステップを踏みながら、あらゆる社会階級より全ての生者を誘い、長い行列をつくる。この死表象の本拠地はフランスとされ、イングランドに伝わるものに関しては、聖ジノサン墓地の回廊に壁画として描かれた「死の舞踏」をベネディクト会士ジョン・リドゲイトが英訳して持ち帰ったものが始まりとされている。本稿ではリドゲイトの英訳も含め、16・17世紀イングランドにおいて印刷出版されたものに限定して考察する。では早速、作品を見てみよう。

2 - 1 . 『死の悲しい踊りと唄：新しく楽しい調べに合わせて我が笛のあとに踊れ』(The dolefull dance and song of death; intituled; Dance after my pipe To a pleasant new tune)

二枚のブロードシートはレイアウトから判断して、バラッド集に収められていたのだと推察される。詩の作者と内容は一致するが、図1は1664年に、



図 1



図 2

いので、一つの街を滅ぼすと直ぐに次の近隣都市へ向かう。図 2 では死と死神を区別して描いており、右側の骸骨（死）は左手に鋤を、右手には鉛筆を持っている。左側の死神は「時の翁」(Father Time) に似て、背中に大きな翼、顎に長い髭をたくわえる。彼は左手に人生の残りの時間を示す砂時計を、右手には命を刈り取る大鎌を持つ。老人の禿頭には運命の女神のような前髪がたなびいており、‘Occasion is bald behind’の概念を死表象に混在させていることが窺えるだろう。以下に詩の一部を抜粋して拙訳を添える。

Can you dance the shaking of the sheets,  
A dance that every one must do?  
Can you trim it up with dainty sweets,  
And every thing as longs thereto?

Make ready then your winding sheet,  
And see how you can better your feet,  
For death is the man that all must meet.  
Bring away the Begger and the King,  
And every man in use degree,  
Bring the old and youngest thing,

あなたは経帷子のダンスを踊れますか  
誰もが避けられない踊りを  
こだわり  
拘りの身支度を心地よく済ませられますか  
全てお望みのままに

では巻き付けるシーツを準備しなさい  
足さばきを良くする巻き方を確かめなさい  
死とは誰もが必ず出会うもの  
物乞いや王様  
全ての階層にあるものを連れて来い  
老人も若者も連れてこい

図 2 は1680年に各々異なる印刷所から出版された。挿絵を見てみよう。挿絵は非識字者にも理解が易いことを目的としている。図 1 では死が帽子を被り、左手に墓穴を掘る鋤を持ち、右手に持つ大きなラッパを吹いて大きな街を背景に歩いている。ベストの歩みは早

Come all to death and follow me. The Courtier with his lofty looks, The Lawyer with his learned Books, The Banker with his baiting-books.	皆私に続いて死へと向かうのだ 高慢な見かけの宮廷人 博識な書物を持つ弁護士 貸し付けを書き留めた出納帳をもつ金貸し
Assure your selves no creature can, Make death afraid of any man, Or know my coming where or when.	誰にもできやしない 死に人間を恐れさせるなど 死がいつどこに現れるか誰にもわからない
For I can quickly cool you all. How hot or stout soever you be, Both high and low, both great and small. I nought do fear your high degree. The Ladies faire, the Beldames old. The Champion stout, the Souldier bold, Must all with me to earthly mold.	私(死)が皆をすぐに冷たくしてあげよう 貴方がいかに熱く大胆であろうと関係ない 身分の高低、身体の大小などどうでもよい 貴方の地位が高くても私は全く気にしない 美しいご婦人、老婆、 豪傑、向こう見ずな軍人 皆私と一緒に土へ還るのだ
Therefore take time while it is lent, Prepare with me your selves to dance, Forget me not, your lives lament, I come often times by sudden chance. Be ready therefore, watch and pray, That when my Minstral Pipe doth play, You may to Heaven dance the way. Finis.	だから束の間の猶予を貸し与えよう 私と一緒に踊る準備を整えよ 死を忘れるな、命を惜しむがよい 死はいつでも突然訪れる 準備をしなさい、心から祈りを捧げよ 私の笛の鳴る音が聞こえたら 楽園への道を踊り進むがよい

( Thomas Hill, *The doleful dance*, ll.1-14, 33-35, 64-78 )

擬人化された死が老若男女、貴賤、身体の大小、美醜、賢愚、貧富、職業を問わず、全ての生者に対して死に備えるよう説く。死曰く、人生は彼の厚意による執行猶予期間なのだ。途中省略した部分には、イタリアやフランスなど近隣諸国への言及に加え、色に耽る者、聖職者、金銭欲に従い他者を騙す商人、若さを奢る乙女への説教がある。

2 - 2 . 『死の踊りと唄』( *The daunce and song of death.* )



図 3

次の作品を見てみよう。図 3 は1569年に印刷された作者不明の一葉である。挿絵の upper 左端から時計周りに見ていくと、金銀を数える高利貸し、老人( The old man ) と幼子( The Childe )、浮浪者( The

Begger ) と国王( The Kyng )、弁護士、下段右端から老人と乙女、豚の膀胱のような道化棒をもつ道化( The Foole )<sup>ii</sup> とコンパスをもつ賢者( The wyse man ) などの二項対立、左下には足首を鎖に繋がれた囚人が、それぞれに軽快なステップを踏む骸骨に付き添われ踊りながら導かれている。舞踏において死にダンスを申し込まれたものは誘いを拒むことができない。中央には病氣と死の吟遊詩人( Sycknes Deathes minstrel ) が、農夫や鋤夫がそれぞれ土を掘るために使う鋤とツルハシを墓穴の上に交差させ、骨を組んだ脆く不安定な椅子に座っている。太鼓とラッパを演奏する吟遊詩人の足元には包帯らしき布が巻かれ、ベスト特有の症状である黒色( 紫色 ) 斑点が両足の鼠蹊部から脚部全体に浮き上がっている。彼も死を見据えているのだ。ここに付された五つの短い詩を、ブロードシードの左から順に読んでみよう。以下、引用に拙訳を添える。



From your gold and silver,  
To grave ye must daunce:  
Though you love it so deare,  
And have therein affiaunce

(高利貸しの唄)  
金銀よさようなら  
お前は墓まで踊るのだ  
どれほど金が愛しくとも  
墓穴までは持っていけない

Thy pryson and chaynes,  
From grave cannot keepe:  
But daunce (though in paynes)  
Thou shalt thereto creepe.

(囚人の唄)  
牢屋に囚われ鎖に繋がれていようと  
墓からは逃れられない  
たとえ苦しく踊れなくとも  
墓場まで這って来い

Come daunce this trace ye people all,  
Both Prince and Begger I say:  
Yea old, yong, wyse, and fooles I call,  
To grave come take your way.  
For Sicknes pipes thereto,  
By griefes and panges of wo.

(詩人の唄)  
さあさ皆さん後に続いて踊りましょう  
王子も物乞いも一緒に  
老いも若きも賢者も阿呆も  
墓へと進みましょう  
病気になったら墓まで笛吹け  
悲しみと痛みでピューピュー

From trone of just judgement,  
Syr Judge daunce with us,  
To grave come incontinent.  
From state lo glorious.

(裁判官の唄)  
公正なる裁きの天秤を離れ  
裁判官殿よ我らと共に踊らん  
急いで栄誉の極みから  
墓穴まで降りて来い

Ye dallying fine Lovers,  
In midst of your chere:  
To daunce here be partners,  
And to grave draw ye nere.

(恋人たちの唄)  
戯れる元気な恋人たちよ  
人生夏の真っ盛り  
恋人をダンスのお供に  
死床へ引きずり込め

ここでも死の普遍性と「死の勝利」が歌われるが、興味深いのは「恋人たちの唄」である。15世紀の「死の舞踏」では、死が生身に触れて警告を与える



様子は描かれなかった。しかし、16世紀以降の芸術や文学にはエロスとタナトスを結びつける「性愛＝死骸趣味」<sup>エロティコ・マカーブル</sup>が現れ、死が乙女や恋人を誘う様子を描き始める。また、ブロードシートの右下部を拡大すると、豊かな髭を蓄えた老人の手は年若い女性の滑らかな頬や胸元へ、女性の右手はテーブルの上に盛られた金銀と酒盃へ伸びており、双方の欲望を互いに満たす「等価交換」の成立する様を描いている。背後から二人をダンスへ誘う死を除いて、「不釣り合いな恋人」はドイツの画家ルーカス・クラナハ（父）が多く描いたモチーフであり、ロンドンにも類似する思想が辿りついていたことを証明する一葉である。

長期のベスト禍を経験すると、本来厳粛かつ荘厳であるべき死は人々の日常と化す。すると、「死の舞踏」の中に極限状態におかれた生者の享楽主義、または刹那主義が現れるようになる。この不謹慎ともとれる死表象を通して、当時の市民は死を茶化し嘲笑しているわけではないし、死を歓迎しているのではない。ブロードシートにおいて可視化・物質化される死は、生者に対して「メント・モリ」(memento mori)の警句を思い起こさせ、束の間の生と性を謳歌せよと説いているのだ。このパラドックスは、忌み嫌うべき死へ捧げる逆説的礼賛とも解釈できる。

2 - 3 . 『よく見よ、すべてここに描かれる』( *Marke well the effect, purtreyed here in all* )

次の「死の舞踏」を見てみよう。図4は1580年に印刷された作者不明の一葉である。ブロードシートの左側から順に聖職者（司教）、騎士、娼婦、弁護士、農夫、死が登場している。まず、各々の吹き出しに記されるリフレインをみてみよう。



図 4

聖書者	「私はあなたのため永久に祈る」	( I praye for you fower )
騎士	「私はあなたを永久に護る」	( I Defende you fower )
娼婦	「私はあなたを永久に征服する」	( I Vanquish you fower )
弁護士	「私は皆の権利に従い皆を助ける」	( I helpe you all to your right )
農夫	「私はあなたをずっと養う」	( I feed you fower )
死	「私は皆を殺す」	( I kill you all )

ここには当時の社会階層を代表する5名の生者に加えて死が、各々の役割に相応しい自負と共に簡潔に表象されている。彼らの主張を聞いてみよう。以下、引用して拙訳を添える。

Marke well the effect, putreyed here in all:  
The Prelate with his dignities renowne,  
The King that rules, the Lawyer in the hall,  
The Harlot and the country toying Clowne:  
Howe and which way together they agree,  
And what their talke and conference might be.  
Ech to their cause, for gard of their degree,  
And yet death is the conquerour you see.

この光景を見よ、すべてここに描かれる  
名誉と威厳に満ちた聖職者  
君臨する国王、法廷の弁護士、  
娼婦や田舎で土耕す農夫  
彼らがどのように何に対して同意するのか  
彼らの話と言い分を聞こうではないか  
各々の理由と身分にふさわしく  
だが結局は死が征服者であるとわかるだろう

The bishop vaunts to pray for thither fower,

司教は祈りを理由に永久に傲慢

As who wold say, he holds the palme & prie,  
And that in him and his most holy power,  
It does depend, their causes to suffice  
I pray (saith he) that Christs continual grace  
May them conduct, & guide in every place.

彼はこう言う、「私は巡礼と祈禱を続ける  
私と私の神聖なる力に  
皆の心を安堵させる理由があるのだ」と  
彼は言う、「神の永久の栄光が我らを導き  
行く先を案内してくれるよう私は祈るのだ」と

The puissant King he claimeth to defend,  
The bishop and the other three like case,  
In all conflictes or broyles unto the end,  
Who but his power their enemies doth deface  
He musters men, and sends them forth a farre  
In their behalf, to maintaine deadly warre.

力ある国王は 司教や他の三人と同じく  
皆を平等に護ると誓う  
全ての戦や騒動を鎮めるのは王なのだ  
だが敵を滅ぼすのは国王の権力ではない  
王は国民を招集し、戦地へ兵を派遣する  
大義のため、死の戦を続けるために

The smiling queane, the harlot cald by name,  
Stands stiffe upon the blasé of beauty brave,  
To vanquish all, she makes her prized clame.  
And that she ought the golden spurs to have,  
For by her slights she can bewitch the best,  
The strong, the Lawyer, & the rest.

微笑みの女王、こう呼ばれる娼婦は  
多少豪華な美の歓楽ぐらいでは動じない  
全てを御してこそ、その名は称賛を増す  
彼女は最上級のもてなしを受けなければ  
なぜなら彼女の一番欲しさに至上者  
強者、弁護士、皆がその奴隷となるのだから

The Lawyer he, in title of his clame,  
Presumeth next, by law and justice true,  
Somewhat the more, to elevate his name:  
For law (saith he) all discord doth subdue:  
It endeth strife, it gives to ech his right,  
And wholly doth contention vanquish quight.

弁護士はその称号において  
また法と真の正義にかけて  
さらに名声を高めようとする  
彼は言う、法は全ての不和を鎮める  
法は争いを終結させ、各々に権力を授ける  
法は闘いにおける勝者であるのだと

The country clowne full loth to lose his right,  
Puts in his foot, and pleads to be the chiefe.  
What can they do (saith he) by power or might,  
If that by me they have not their reliefe?  
For want of food they should all perish than,  
What say you now to me the country man.

土耕す農夫は悟ったように権利を手放す  
地に足をつけ 支配者になろうとはしない  
農夫は言う、武力や権力で一体何ができる  
安楽を与えているのは私だ  
食べ物が無いと皆死んでしまうだろう  
さあ皆さん私に文句が言えますか

For want of me they should both live and lacke,

私がいなければ、生きるも死ぬも必然

For want of me they could not till the earth,  
And [...] curve on my backe,  
This [...] not of dearth.  
I feast then [...] even at their ease.

私がいなければ皆は土を耕せない

Death that aloofe stealing wise doth stand  
Hearing the vaunts that they begin to make.  
Straight steppeth forth, with piercing dart I had  
And boldly seems the quarrel up to take.  
Are they (saith he) so proud in their degree,  
Lo, here by me soone conquered shall they bee,

死は賢明にも遠く離れた場所に立ち  
五人の自負を盗み聞く  
すぐに進み出て、鋭い矢で狙い射る  
間違いなく議論は終わるだろう  
死は言う、彼らは身の丈にしてあまりに傲慢  
見よ すぐさま私に征服されよう

And standing by to give their later foode,  
He entreath straight, the conquest to attaine,  
Thers none of them (saith he) the chiefest bloud  
That valiant death intendeth to refraine,  
Ile crop their crowne & garlands fresh and gay,  
And at the last Ile shrine them all in clay.

死は彼らに宴席を設けて傍に立ち  
自らの勝利を得るため直ちに款待する  
死は言う、最も高貴な血など存在しない  
勇猛なる死こそが永久の統治者  
絢爛たる王冠と栄誉が現れる度に摘み取ろう  
結局は私が彼らを土の中へと屠るのだ

I pray for you all. I vanquish you all.  
I help you all to your right. I feede you all.  
I defend you all. I will kill you all.

皆のため祈ろう、皆を征服しよう  
皆の権利に相应しく助けよう、皆を養おう  
皆を護ろう、皆を殺そう

The authors Apostrophe to the Reader.

作者による読者への呼びかけ

Here may you see, what as the world might be,  
The rich, the poore, Earle, Cesar, Duke, & King  
Death spareth not the chiefest high degree,  
He triumphes still, on every earthly thing,  
While then we live let us endeavour still,  
That all our works agree with Gods good will.

さあわかるでしょう、この世の有様が  
富裕者、貧者、伯爵、公爵、そして国王  
死は高貴な者をも逃さない  
地上の全てにおいて死は常に勝者  
我ら生者は常に骨折らなければ  
全ての所業が神の御心に叶うようにと  
( Marke well the effect, purtreyed here in all )

第7スタンザは文字が擦れているため解読不可能だが、この一葉も死を媒介とする平等思想、および「死の勝利」を歌うものであることは確かだ。

細部について、珍しい登場人物、農夫 (the country toyling Clowne) に注目すると、彼の鼻頭は赤い。彼の衣服は膝が破れ、袖口や裾など全体的に擦り切れており、他の生者が豪奢に身なりを整える様子と比べて異彩を放つ。彼の抱える農耕具は、畑を耕し命を繋ぐにも、墓を掘り死を弔うにも使われる。死表象において農耕具は、生と死の二項対立を結びつける両義的アイコンとなる。先に考察した『死の悲しい踊りと唄』の挿絵に描かれる死も鋤を携え、『死の踊りと唄』中央部に佇む吟遊詩人も、墓穴の上に鋤とツルハシを重ねていた。ここでの農夫は、世界の生命の循環を担うことに自負を抱いている。



木版画の上部を見てみよう。東屋で騎士、娼婦、弁護士、司祭が肉、果実、酒に舌鼓を打ち、そこへ鉛矢を持った死が駆け寄り、料理を一皿追加して「今を愉しめ」と言わんばかりに彼らを歓待している(左:図4上部拡大)。四名に死を恐れる様子はないが、農夫だけはテーブルの下に隠れて怯えている。死後の世界について1535年出版のカヴァデル聖書を見ると、コリント人への第一の手紙15章では、やはり信仰による死後の蘇りや千年王国を疑っていない。ラッパの音が響くや土中にて待つ肉体は眠りから覚め蘇ると教える (Coverdale lxxviii)。聖書は終末観と千年王国への憧れを教え、生前の労苦を惜しむな、魂の価値を高めよと説くわけだが、農夫の恐怖を描くのは彼の無知を揶揄するためのものではなく、非宗教的な死生観を表象するためのものだ。日頃から土を凝視する農夫は、肉体が人であれ動物であれ、どのような変化を経て土へ還り、次の命へ巡るのか熟知している (Thomas 233)。15世紀には、死は罪の報い、肉体の崩壊は罪人の印、遺体の腐敗は生前の罪の視覚化であり、徘徊する蛆虫は悔悛の視覚的象徴と解釈されたため、高位聖職者の遺体はいずれ来る蘇りの時まで腐敗を免れ、花の香を放つという説が誕生したとされる。しかし、1580年に印刷された農夫はその教義に疑問

を呈するため、キリスト教の終末論的な時間を否定するために存在する。「死の舞踏」は天上ではなく足元に深く広がる土の世界を見つめている。

この一葉は、作品の出来栄えから教養と財力を備える人物が発注したものと推測されるが、作者は不明だ。匿名とした理由は、作品が個人の才ではなく神が授ける<sup>インスピレーション</sup>霊感に依ると考えたからではなく、この一葉が当時の宗教的教義の疑義をただす死生観を表象するためであろう。農夫が示す死への恐怖は、この世の栄華を驕る高位聖職者らの現実に対する盲目を皮肉とともに指摘する役割をも兼ねている。

もうひとり、娼婦(The Harlot)にも注目したい。死の舞踏に登場する女性は、当時の女性の職業や社会階級の種類の少ないため、そのヴァリエーションは乏しい。血脈や婚姻関係を根拠とする女王や王女、人生の各段階を象徴するものとしての<sup>おとめ</sup>処女や花嫁、妊婦、老婆の例は見られる。ここで登場する娼婦の資本は、農夫がその腐敗を恐れる肉だ。彼女は当時の家父長制、長子相続制社会において権力者に対峙する際、外見的な煌びやかさだけでなく、微笑みと侮蔑、潤いと乾き、熱と冷淡を使い分ける。だが、肉の腐敗同様、彼女の栄華は切り取られた一瞬の出来事である。娼婦は全てが「虚」(vanity)であることを表象するため、残念ながらここでは手に鏡を掲げてはいないものの、<sup>とき</sup>流行の衣装を纏い、豊かに髪を結って微笑む様を呈している。この一葉は全体として、ペスト流行時、死による捕縛が不可避であり、肉が土へ還ることを物語る。

## 2 - 4 . 「死の舞踏」( 'The Dance of Machabree' )

最後にもうひとつ作品を見てみよう。この詩は、1683年に出版された360頁もある大著に掲載された僅か9頁(pp 367 374)の作品である。詩は、1426年から1431年までパリに滞在していたジョン・リドゲイトが聖ジノサン墓地の壁画に記されていた伝話を英訳し、イングランドへ持ち帰ったものであると考えられる。銅版画らしき挿絵を見ると、死と生者が交互に並び長い列を成している。先頭を進む乾いた骸骨は砂時計を右手に持ち、左手で教皇を導く。「死



図5

の舞踏」には当時の社会に存在した職業一覧の役割があり、腐乱死骸像は、5スタンザあるプロローグの後、まず教皇（the Pope）へ話しかけ、それに教皇が応答する。続いて皇帝（the Emperour）枢機卿（the Cardial）国王（the King）総主教（the Patriarchs）大司教（the Archbishop）男爵（the Baron）外科医・床

屋（Sergeant）天文学者（the Astronomer）商人（Marchant）高利貸し（the Usurer）修道士（Monke）労働者（Labourer）などに加え、79スタンザ続く長い詩の終盤では幼子（Child）や隠者（the Hermit）最後には蛆虫に喰われる国王（The King eaten of Worms）が登場する。ここでは舞踏の最初と最後の声を聴いてみよう。以下、抜粋して拙訳を添える。

THE | DAUNCE | OF | MACHABREE : | Wherein is lively expressed and showed  
the state of manne, and how | he is called at uncertayne tiymes by Death, and when he  
| thinketh least thereon: Made by *Dan John | Lydgate* Monk of S. Edmunds Bury.

「死の舞踏」そこには人間の姿、彼らが不意に死に誘われる様がまざまざと描かれる。ベリー・セント・エドマンズの修道士ジョン・リドゲイトが記す。

Death fyrst speaketh unto | Pope, and after to every degree as follow- | eth.

死は最初に教皇へ、続いてそれぞれの階級へと話しかける。

Ye that been set most in high dignity,  
Of all estates in earth spiritual

汝、この世の階級において  
最高位に就きし者よ



And like as Peter hath the soveraintee,  
Over the church and states temporall,  
Upon this daunce ye first begin shall,  
As most worthy lord and governour,  
For all the worship of your estate Papall,  
And of Lordship to God is the honour.

The Pope maketh answer.  
Fyrst me behoveth this daunce for to lede,  
Which sat in earth highest in my see,  
The state full perilous who so taketh heed,  
To occupie Peters dignity,  
But for all that death I may not flee,  
On this daunce with other for to trace,  
For which all honour who prudently can see,  
Is little worth that doth so soon passe.

Death speaketh to the Emperour.  
Syr Emperour lord of all the ground,  
Sovereine prince and highest of noblesse,  
Ye mot forsake of gold your apple round  
Scepter and swerd and all your high promessee,  
Behind letten your treasour and your riches,  
And with other to my daunce obey  
Against my might is worth none hardinesse,  
Adams children all they must deye.

The Emperour maketh aunswer.  
I dote to whom that I may appeal  
Couching death which doth me so constrein  
There is no gin to helyen my querell  
But spade and pickoys my grave to attayne,  
A simple sheet there is no more to seyn,  
To wrappen in my body and visage,  
Whereupon sore I me compleyne,  
That great Lordes have little advantage.

初代教皇ペトロよろしく  
教会と現世の全てを支配する者  
まずは其方が舞踏へ加わるのだ  
最も崇高な君主かつ統治者として  
ローマ教皇の名にふさわしく  
神へ仕える者の威厳のために

教皇が答える  
私が舞踏の先頭にふさわしい  
この世の最高位にあるのだから  
一体誰がそんな危険に心を配るのだ  
教皇の権威を纏いたいのがために  
何とひきかえても死は不可避  
他の者も続いて舞踏に加わるがよい  
さすれば名誉とは何か判るだろう  
通り過ぎるものに価値など無い

死が皇帝に話しかける  
さあこの世の統治者である皇帝よ  
高貴な主権者かつ崇高な至上者よ  
お前が手放さない黄金の宝珠  
王笏と宝剣とすべての高い望みを  
歓喜と贅沢と共に捨てるが好い  
皆と一緒に舞踏へ加われ  
我が力に逆らうと碌なことは無い  
アダムの末裔は皆死なねばならぬ

皇帝が答える  
私は私の気に入る者へ耳を傾ける  
私をこうも束縛して寛いでいる死  
私の文句には誰も耳を貸さない  
ただ鋤とツルハシが私の墓を掘る  
一枚のシーツすらもう無い  
私の身体と顔が土に覆われる  
そこで私は嘆くのだ  
偉大な君主も死を免れる特権は無い

[...]

The King eaten of Worms.  
Ye folke that look upon this portrature,  
Beholding here all estates daunce,  
Seeth what ye have been, and what is your nature  
Meat unto worms nought els in substance.  
And have this mirrour aye in remembrance,  
How I lye here whilom crowned King,  
To all estates a true resemblance,  
That worms food is the fine of your living.

蛆に喰われる国王  
この絵を見よ  
ここにすべての階級の舞踏を眺めよ  
お前の生前の姿と本質を見るのだ  
蛆へ捧ぐ肉の他には何も無い  
ここに映るものを忘れるな  
王冠を戴き永久に眠る国王の様を  
万人に真実の教えを語るのだ  
蛆の餌食となるのが人生の結末

( 'The Dance of Machabree', ll.57-88, 633-640 )

生者の返答には、死への強迫観念、実り多き秋への未練と執着、その喪失に伴う苦悩が込められている。ここまで4点の「死の舞踏」を考察してきたが、「土」( Clay ) 「鋤」( spade ) 「ツルハシ」( pickaxe ) 「シーツ・経帷子」( sheet ) 「お客様」( guest ) は「死の舞踏」における常套文句だと気付くだろう。瀕死者の呼吸の音を意味する「笛」( pipe ) を除いて、これら全ての語はシェイクスピア戯曲『ハムレット』5幕1場にも登場する。墓掘人夫の唄は「死の舞踏」のパロディであるという可能性を指摘できるだろう。

*Clowne* A picke-axe and a fpade,  
A fpade for and a winding fheete,  
Moft fit it is, for t' will be made, *he throwes vp a fhouel.*  
For fuch a gheft moft meete.

(William Shakespeare, *The tragicall historie of Hamlet Prince of Denmarke*, pub.1603, H 4<sup>v</sup>)

*Clow.* A pickaw and a fpade a fpade, *Song.*  
for and a fhrowding fheet,  
O a pit of Clay for to be made  
for fuch a gueft is meet.

(William Shakespeare, *The tragicall historie of Hamlet, Prince of Denmarke*, pub.1604, M 2<sup>v</sup>)

また、「死の舞踏」は死の普遍性を語る性質上、参列者の順番は社会階級とは無関係とするが、挿絵のように舞踏の様子が行列となると、先頭には教皇や皇帝が配置され、階級の上下が意識される。しかし、この詩の内容は最後まで辿りつくとも最初へと循環する。この世の贅を味わい尽くした国王の肉体は、喰い喰われる立場を逆さにして、大地に消化吸収されるのであり、農耕具の概念と同様、二律背反的な概念を内包する土は墓 (tomb) となり胎 (womb) となる。シーツも歓喜や甘美に満ちた生と、対極にある死を包む点で両義的となる。土中残る骨は「死の舞踏」を編み、生命が始点と終点をもつ直線ではなく、幾重にも巡る円環で表象されることを伝える。

### 3 . おわりに

16 17世紀ロンドン、ペスト流行を原因とする恒常的な闇の中より「死の舞踏」は多数印刷出版された。詩に添えられる図像は骸骨に満ち、死は鉛矢、大鎌、砂時計、農耕具を携える。死を語るとき常に「肉」「土」「掘る」「包む」「巡る」という、土葬文化圏における有機体の循環の概念が意識される。勿論ここで紹介できていない死の舞踏図は多く残るが、本稿が考察するどの作品においても非宗教的な死生観、「死の勝利」、「メメント・モリ」、死を媒介とする平等思想、刹那主義などの共通点が認められる。

「死の舞踏」のモチーフはやがて使い古され、社会は信仰による救済に限界を感じ、内臓の発見への興味を抱き始める。衰微する宗教と旺盛する医学が同居する17世紀イングランドの印刷物において、いかに生きいかに死ぬか、不可避な死を背景に生を謳歌せよと説く腐乱死骸像の虚無感は、今日の生者の胸にも何かしら響くものがあるかもしれない。

## 注

<sup>i</sup> 死亡週報に関する詳しい考察は『熊本県立大学大学院文学研究科論集第9号』、「17世紀イングランドにおけるベスト流行時の死亡週報について」(2016年9月)に記している。

<sup>ii</sup> 膨らませた豚の膀胱は、道化が携える場合も見られるが、フランドル地方の画家ピーテル・ブリューゲルの絵画『子供の遊び』の例では、玩具として子供が手に振り回している。

## 図・挿絵

### 1 . 死亡週報

- A) Worshipful Company of Parish Clerks. *A true bill of the vvhole number that hath died in the cittie of London, the city of VWestminster, the cittie of Norwich, and diuers other places, ...*, London: printed by I.R[oberts], for Iohn Trundle, and are to be sold at his shop in Barbican, neere Long lane end, [1603]. STC (2nd ed.) / 16743.3
- B) Anon. *Lord haue mercy vpon vs A speciall remedy for the plague*, [London] : Printed [by R. Young and M. Flesher] for M. S[parke] Junior, [1636]. STC (2nd ed.) / 20875
- C) Anon. *Londons loud cryes to the Lord by prayer ...*, London: printed for T. Mabb, for R. Burton, and R. Gilbertson [sic], [1665]. Wing (CD-ROM, 1996) / L2938
- D) Anon. *The mourning-cross: or; England's Lord have mercy upon us ...*, London: printed by Tho. Milbourn in Jewen-street, MDCLXV. [1665]. Wing (2nd ed.) / M2991B
- E) Worshipful Company of Parish Clerks. *A general bill of all the christnings and burials, from the 17. of December, 1678 to the 16. of December, 1679 according to the report made to the Kings Most Excellent Majesty, by the Company of Parish-Clerks of London, &c.* [London : s.n., 1679]. Wing / G492

### 2 . 死の舞踏

- 図 1 ) Hill, Thomas. *The dolefull dance and song of death; intituled; Dance after my pipe To a pleasant new tune.* [London] : Printed for F, [sic] Coles , T. Vere, and W. Gilbertson, [1664]. Wing (2nd ed.) / H2013B

- 図 2 ) Hill, Thomas. *The doleful dance, and song of death; intituled, Dance after my pipe To a pleasant new tune.* London : for F. Coles, T. Vere, I. Wright, J. Clarke, W. Thackeray, and T. Passenger, 1680. Wing (2nd ed.) / H2014
- 図 3 ) Anon. *The daunce and song of death.* London : J. Awdely, 1569. STC (2nd ed.) / 6222
- 図 4 ) Anon. *Marke well the effect, purtreyed here in all: The Prelate with his dignities renounce, ...* [London : s.n., 1580?], 1580. STC (2nd ed.) / 6223 A3\_4\_62
- 図 5 ) Sir William Dugdale. *Monastici Anglicani. additamenta quaedam in volumen primum, ac volumen secundum, jam pridem edita: necnon fundationes, sive dotationes diversarum ecclesiarum cathedralium ac collegiatarum continens; / ex archivis regiis, ipsius autographis, ac diversis codicibus manuscriptis decerpta, et hoc congesta per Will. Dugdale Warwicensem Norroy Regem Armorum. Volumen tertium et ultimim:* Londini : Prostant apud Robertum Scott bibliopolam, 1683. Wing (2nd ed.), / D2486C, p.368

## 引用文献

- Anon. *Marke well the effect, purtreyed here in all: The Prelate with his dignities renounce,...* London : s.n., 1580?], 1580. STC (2nd ed.) / 6223 A3\_4\_62
- Coverdale, Miles. *Biblia the Byble, that is, the holy Scrypture of the Olde and New Testament, faithfully translated in to Englyshe.* [Southwark?, J. Nycolson], M.D.XXXV. STC (2nd ed.) / 2063.3
- Defoe, Daniel. *A Journal of the Plague Year*, London: Penguin Classics, 2003.
- God's judgments shewn unto mankind. *A true and sorrowful relation of the sufferings of the inhabitants of the city of Marseilles in France, now under the dreadful calamity of the plague, pestilence and fevers, with the manner of its infecting them by vomiting, pains in the head, or purple boils under their arm pits, the number of the dead being above fifty thousand. And lastly the cause of it, and from whence it came, by a strict order from the Regent to the College of Physicians at Capentras. Tune of, Aim not too high. / Written by Tho. Gent.* London : s.n., 1721. Tract Supplement / A1:1 [338]
- Hill, Thomas. *The dolefull dance and song of death; intituled; Dance after my pipe To a pleasant new tune.* [London] : Printed for F, [sic] Coles , T. Vere, and W. Gilbertson, [1664]. Wing (2nd ed.) / H2013B
- *The doleful dance, and song of death; intituled, Dance after my pipe To a pleasant new tune.* London : for F. Coles, T. Vere, I. Wright, J. Clarke, W. Thackeray, and T.

Passenger, 1680. Wing (2nd ed.) / H2014

Shakespeare, William. *The tragicall historie of Hamlet Prince of Denmarke by William Shake-speare*, London: Printed [by Valentine Simmes] for N[icholas] L[ing] and Iohn Trundell, 1603. STC (2nd ed.) / 22275 Greg, I, 197(a)

-----, *The tragicall historie of Hamlet, Prince of Denmarke. By William Shakespeare*, London: Printed by I[ames] R[oberts] for N[icholas] L[ing] and are to be sold at his shoppe vnder Saint Dunstons Church in Fleetstreet, 1604. STC (2nd ed.) / 22276 Greg, I, 197(b\*)

Thomas, Keith. *The End of Life: Roads to Fulfilment in Early Modern England*, Oxford University Press, 2010.